『詞の玉緒』の先蹤としてのてにをは研究書

――特に『氏邇乎波義慣鈔』の内容との比較――

古田東朔

はじめに

本居宣長の『ひも鏡』（明和八年成）、ならびに『詞の玉緒』（安永八年成）が、先行のてにをは研究書の流れによりながら、さらにそれらを超えて、てにをはに「本末をかなへあはするさだまり」の一貫して存することを明らかにした書であることは、今ここに改めて言うまでもない。

それはどのように先行のてにをは研究書の傾向を受けつぐものであったか。その点に関しては、すでに先学の明らかにされたところである。内容上からいえば、先行のてにをは研究が、包括していた事項として、時枝誠記博士は『国語学史』の中で、

一　単独のてにをは
二　呼応の関係
三　歌の留り、切れ

の三綱目をとりあげられ、それに従って『玉緒』のてにをは研究についても考察された。

また、具体的な影響関係については、山田孝雄博士は、後にも見るごとく『てには網引綱』が宣長の蔵書目録にも見え、かつその下巻でとりあげている、結びの辞の変化の示し方や、「つつ」「かな」を結びの辞とする点が『玉緒』と共通することなどから、この書が宣長のてにをは研究の資料となったものであることを明らかにされた。このほか、国語学史に関する研究書、論考の中で、てにをは研究書と『玉緒』の関係について述べているものは少なくない。

てにをはは研究書において、てにをはの係りと結びの関係についてどこまで明らかにされていたかが『玉緒』と比較されることによって『玉緒』の意義、特色はさらに明確なものとなる。ここでは、『氏邇乎波義慣鈔』の内容を中心として、他のてにをは研究書も参照しながら、その内容について比較してみたい。従来言われているよりも、深い関係があるように私には思える。結論としては、これまで言われていることとさほど異なるものではないが、問題点や細部においてはやや違った点も存するであろう。

ただ、最初に断わっておきたいことは、ここに取り上げようとするてにをは研究書を、宣長がすべて見たであろうなどと考えているわけではないことである。『氏邇乎波義慣鈔』も、内容を比較すると

き、連関があるようには思えるのだが、証拠の見いだせない現在、断言を保留するほかない。しかしながら、直接的関係の有無にかかわらず、てにをは研究書において、どういう風潮があり、その中にあって、宣長がその研究をどう発展させたかという、研究の流れにおいては、当然考慮しておいてよいことがらであろう。

一　これまでの説

宣長の考えと、それ以前のてにをは研究書の成果との関係について特にとりあげられる書は、『てには網引綱』（明和七年刊）と、『氏遍乎波義慣鈔』（宝暦十年成）とである。これらについて、どのように取りあげられているか、やや長い引用になるが、しばらくながめてみたい。このうち、まず前者の『網引綱』については、すでに『日本文学大辞典』で、

又活用するものには、「けり・ける・けれ」「なり・なる・なれ」の類をあげて呼応を示しているが、これをなお一歩進めれば宣長の「紐鏡」や「詞の玉緒」の如き係結の研究となるものである。要するにこの書は、てにをは研究史上特筆すべきものである。

と述べられていたが、その宣長の説との関係は、山田孝雄博士によって、さらに明らかにされた。『国語学史要』ですでに述べられていることであるが、ここでは『国語学史』のほうの文章を引く。

惟ふに、かくの如き一覧表としたるものは未だなかりしといへども、かかる関係の存することは従来の研究家の知らざりしにはあらず。たとへば、紐鏡より一年前に出版せられしかのてには網引綱の如きは、たとへば

けり　ける　けれ

けん　き

と標して

けりは結語の辞也。強き辞也。ける、けれは緩急あり。そといへはけるとおさゆるはつまりて急なり。こそといへば、けれといふはとまらざる意にして緩なり。

といへる如くなるが、その標目をかくの如くせるは係結の所謂緩急の順によりて配置せること明かなるが、その部分を抽出せば、

けり　ける　けれ
なり　なる　なれ
めり　める　めれ
たり　たる　たれ
せり　せる　せれ
ぬる　ぬれ
つる　つれ

の如くにてあるなり。かくの如くに一々の例を探りつゝ行く時は多少ともその先蹤は知らるゝなり。かくてその先蹤のうち、特に著しきは梅井道敏のてには網引綱なり。余は本居の蔵書印あるこの本を偶然大阪の書肆より購ひ得たるが、この本の名は本居の蔵書目録にも載する所なり。これは紐鏡より一年前に世に出でたる書なるが、この書の下巻と詞の玉緒の第一巻の組織とを比べ見れば、精粗の差はあれど、相通ずる所あることは著しきなり。特に「つつ」「かな」を結辞とすることは手爾波大概抄の筒留などの余波にして、旧式のてにをは学者のすべていふ所にして、てには網引綱にもまたこの二語を結辞の末に置きてあるが、玉緒も亦之を末に置けり。元来紐鏡はいづれもその結辞をば活用あるものにつき

て三段又は二段に表示するものにして「つゝ」「かな」の如き活用なきものは載すること無きに、詞の玉緒に至りて、特にこの二語を末に加へたることはその状網引綱と全然一致せるを見る。かくして「つつ」「かな」は旧来歌道に於いて最も大事の詞とせるを見れば、本居も亦未だ旧套を全然脱却し得ざりしことを証するものといふべし。この故に本居のこの研究の資料は従来のてにをは研究より得たることは疑ふべからざることなりといふべし。

右のように述べられたのである。

『義慣鈔』については、同じく山田孝雄博士は、『国語学史』で、

然れども、本書が一切古今集に例証を求めて、帰納的に証明せむと企てたる、その態度は純然たる学術的の研究法によれるものにして、この点は後人に範を垂れたるものとして賞賛せざるべからず。而して、この書の研究の主題とする所は、和歌八重垣の巻二に基づくものと考へらるゝが、或は春樹顕秘増抄の伝授を受くる所ありての事ならむとも見らるゝ点あり。要するにこの書は旧派のてにをは研究が、先づ研究法の方面より学術的になり来れることを示すものといふべし。

と述べられ、その研究の態度・方法が従前のてにをは研究に比べて学術的になっている点を注意された。さらに、重松信弘博士は、山田博士と同様にこの書を重視して、

説き方に未だ充分でないものはあるが、宣長の玉緒に於ける第一類の係「は・も・徒」は全部注目されて居り、第二類の「ぞ・の・や・何」(補はるべきか迄も)第三類の「こそ」も注目せられてゐる。宣長が此書を見たかどうかは固より判らないが、仮令知らなかつたとしても、てにをはの研究が玉緒の方向に改訂されるべき機運にあつた事を物語るものであり、その意味に於て本居への先駆的意義が多分に認められる。

と『国語学史概説』の中で述べられた。「宣長が此書を見たかどうかは固より判らないが」と述べられてのことであるが、宣長の『玉緒』への先駆的意義を、係助詞の「は・も」などについてすでに注目しているという点から、認められているのである。

この点については、田辺正男博士も、その『国語学史』の中で、次に係りのことばについては、すでに述べたやうに、ひも鏡よりは十年ほど前に成つた氐邇乎波義慣鈔あたりが影響を与へたのではなからうか。もちろん、結びのことばとにらみ合せて「は、も、徒」「ぞ、の、や、何」「こそ」の三系列に組織だてるやうな事は、宣長以前だれも思ひ及ばないところであった。

と述べられた。ともに、『義慣鈔』が「は」「も」を取りあげている点、宣長に影響を与えているのではないかとの見解を示されているのである。

以上、やや長きにわたったが、『網引綱』と『義慣鈔』に関する先学の見解をながめてきた。

宣長は、宝暦二年から七年まで京にいて学んでいる間、特に六年から七年にかけては有賀長川(長因、敬義斎)の月次会や臨時の会に出席している。「在京日記」(『本居宣長稿本全集第一輯』)によれば、六年の五・六・七・八・九・十一・同閏・十二月、七年の正・四・五・八月に出ている。有賀長因はいうまでもなく、長伯の孫である。長伯には『春樹顕秘増抄』の著があり、『和歌八重垣』の中には、てにをはについて説くところがある。長因自身も、東大国語研究室蔵の『春樹顕秘増抄』(『国語学大系』所収)の奥書によれ

ば、同書の伝授も行なっている。宣長は、まさにそのようなてにをは伝授書、刊行された研究書などについて知り得る環境のただ中にあって、歌を学んでいたわけである。『網引綱』以外のものについても、目にふれたり、手にしたりする機会はあり得たと思われる。

二『義慣鈔』との比較

㈠「は」「も」と「何」の類

まず第一に「かかり」のことばとする語について、『義慣鈔』に述べるところと、『ひも鏡』『玉緒』に述べるところを比較してみる。その点では右にもすでに指摘されていたように、「は」「も」への注目ということがある。すでにいわれていることであるから、他のてにをは研究書も合わせて、簡単に見ておく。これは、てにをは研究書の伝えられていく過程で、しだいに付け加えられてきたようである。『姉小路家手似葉伝』にはないが、『春樹顕秘抄』になると、最後に

ぞこそれ思ひきやとははりやらんこれぞ五つの留りなりける

の歌が示されるに至っている。しかし、そこでは証歌があげられているだけであり、『和歌童蒙抄』になって、「はといへは、りととまる。人はいふなり、秋はきにけりのたくひ也」の説明が加えられた形で示されるようになった。

しかし、これが『義慣鈔』では、「も」も加えて「ぞに通ふ」として取りあげるようになっている。もっとも、ここで「ぞに通ふ」として述べる態度は「の」についても行なっており、

也にかよふ乃をおきてはぬるあり。（「武」の条）

曽にかよふ乃あり、上にかゝへなる（き）時は乃とおかす、そとおくよし、物に見えたり。（「乃」の条）

のように述べている。この点は、『姉小路家手似葉伝』『顕秘抄』『てには秘伝抄』『増抄』（『義慣鈔』をはじめ、（以下これらの文章は、『国語学大系』所収のものは、それに従う。伝授書にあっては、異同が種々考えられるところであるが、一応これらによって代表させて見ることにする。）などでもすでに述べているところであった。ただ、中には、「ふかき口伝也」（『てには秘伝抄』）のように述べるだけで、証歌を示していないものもある。しかし「は」「も」も、これらの説き方にならって加えられるに至ったものであろう。

『義慣鈔』は「ぞに通ふ」ところの「は・も」について、次のように述べている。

ぞ↑↓は

そにかよふ波あり。五音第三のおんにてとまる。（「波」の条）

そとおさへてけるととまるへきをいひすてんとて、そを波にすればとまりけりとなる。是は利の所に出す。又そといふへきを波とおけは、ぬととまるへきうたのすとなる。いつれも言捨たる氐爾葉也。（「波」の条）

之はいひなかす氐爾乎波なり。曽といふへきを波とおさゆるとき、幾ととまるへき歌の之となる也。（「之」の条）

利はいひなかす氐爾乎波也。おほよそ曽といひて留と成るへきをおきかへて波利となるにや。（「り」の条）

ぞ↑↓も

もとおさへてすてたるあり。是は曽にかよふ毛なれは、留ととまるへきが利と転する也。（「り」の条）

曽にかよふ毛あり。五音第三の音あるひは幾とうくる。（「毛」の

条）

このほかの書では、「は」や「も」について述べているものは見あたらないが、ただ『網引綱』は、「ぞ」と「は」を比較して、

私云　そは強くをすてにはなるか故に、おさへの字も治定の字ならては義理相叶はさる也。しかるに五音第三音を以ておさゆるを秘説なといふ事は僻事なるへし。そといひはなしておさへのなき歌、又あけてかそふへからす、所詮一首の体によるへし。……私云はとそと大体同し。しかれともはの字は強く物をかきり、その字は強く物ををしていふ心有。よりてあつかひ聊意味たかふへし。

のように述べている。どういう点が「大体同し」なのか、ここではあまり明確でなく、また「ぞ」の結びについても理法の存することを必ずしも認めない立場に立っており、この点、宣長とは最も相違する態度である。（『網引綱』は「てにはゝ活物なれば、一格に定めがたき事」とするが、宣長はそこに一定の理法を見ようとする。）

次に、かかりの語としての「何」について見る。宣長が「ぞ・の・や」に合わせて「何」をとりあげたのも、もちろん先行のてにをは研究書の態度に規制されたものであろう。しかし、やはり『義慣鈔』あたりから、その態度には変化が見られる。これについては、すでに「上に置きてはぬる字」として『手爾葉大概抄之抄』からいわれてきたところである。その多くは「らん」に関係あるものとして説かれてきた。どういう語をそれぞれとりあげているか、次に見る。

手爾葉大概抄之抄……か　かも　かは　何　なと　や　なそ　いつ　いかに　いかて

姉小路家手以葉伝……（や）　か　かは　かも　なに　なそ　なと　いつ　いつく　いかに　いかなる　いかてか　いくたひ　たれ　いつれ

春樹顕秒抄……か　かは　かも　なに　など　なぞ　いづち　いつ　いづく　いかに　いづれ　いかなる　いかでか　いくたひ　たれ　や

和歌てには秘伝抄……いつ　いくたひ　なと　いつこ　いつれ　たか　か　いかなる　いかに　なに　かは　さこそ　いかて

春樹顕秘増抄……や　か　かは　かも　なに　なそ　なと　いく　いつち　いつ　いかに　いかて　いかなる　たれ　いつれ

氐邇乎波義慣鈔……や　か　たれ・たが　なに・なと・なそ　いく・いつ・（いつく）・いつこ・いつち・いつれ・いかに・（いかて）

てには網引綱……いつ　いつれ　たれ　なと　さそ

詞の玉緒……なに　など　なぞ　たれ　たが　いかに　いかゞ　いかで　いづら　いつ　いく

これらを見て感じることは、最初のころのてには伝授書では助詞の「か」や「かは」なども一緒に合わせて述べているが、やがてそれらを別にして「何類」のものを一括して示すようになっていることである。『義慣鈔』に至って「武」の条で、「や」「か」を前に出し、「た（れ等）」「な（に等）」「い（つ等）」の類ごとに、一まとめにして、その証歌をあげるようになっている。『玉緒』の類別は、これに最も近い。（しかし、「か」について『義慣鈔』の説くところは少ない。）

以上の点からすると、先行のてにをは研究書は、「ぞ↕や」「ぞ↕の」「や↕何」という点から共通するところを認めている。しかし、

てにをは研究書はまだ一類とはしていなかった。宣長は『玉緒』の「ぞ」のところで

其中にぞはると結べる哥おほくして、んとはぬる類の哥はおのづからおほからず。又や何などは、疑ふ辞なる故に、おのづからんとはぬる哥おほくして、るると結ぶ類はすくなし。これおのづからよりきたるもの也。

のように述べている。先行のてにをは研究書は多く、疑う意と「ん」とはねることから「や」「何」はそれで一まとめにし、「ぞ」とは別の一類としてとりあげていたのである。しかし、宣長は語の形式上からの係りと結びという点、それも結びの形の同一という点から、「ぞ」と「や・何」などを一類にまとめ得たのである。

以上の点を比べるとき、「ぞに通ふ」という観点から、

「は」「も」の類

「ぞ」「の」「や」「何」の類

の別の立てられる直前のところまでは、進んでいたと見ることができる。

(二) 三転証歌の例示

第二に、『玉緒』の巻一にある三転証歌の例示のしかたということがある。たとえば、『ひも鏡』第一段の「し・き・けれ」に関する「ぞ」の証歌では、

かくばかりをしと思ふ夜をいたづらにねてあかすらん人さへ〔ぞ〕う〔き〕

のこりなくちる〔ぞ〕めでたき〔き〕＝さくらばな有て世中はてのうければ

のように、終わりに結びのきている歌と、「なかばにて切れたる哥」との、二例を示している。「の」だけは後者について「をさ〳〵見あたらず」として、前者の例一つに限っているが、他はすべて両方の証歌を示しているのである。この点は、『義慣鈔』も同様であって、「曽」の条の「き」の所では、右と同じ「かくはかりをしとおもふよを」の歌を最初として、完全な歌二十二首かかげた後に、やはり右と同じく「のこりなく散そめてたき」を最初として、これはその例証となる語句だけを八例あげている。『義慣鈔』のこの方式は、全体を通じてとられているところである。そして、かような方式は、他のてにをは研究書には見られない。単なる偶然でもなさそうに思われるが、どうであろうか。

さらに、この三転証歌としてあげられている歌と、『義慣鈔』にあげられている歌とを比較してみると、(ただし、『義慣鈔』は古今集からだけ証歌をとっているので、この点八代集からとった宣長に及ばないことはもちろんである。)、古今については、かなり一致する部分がある。中には、右にあげた「ぞ」の例のように、『義慣鈔』でそれぞれ最初にあげているもの二例を同じく『ひも鏡』で証歌としているような場合さえあり、これはかなり数が多い。

しかしながら、この点については、「ぞ」を受けて「き」と結んでいる例として、古今集の巻頭から見ていくときには、これらの証歌がそれぞれ最初になるものである。したがって、両書ともに、一致したということも考えられるのである。他の証歌の例も比べてみるときには、『義慣鈔』のほうは、ある方針でもって古今集に出てくる用例を、その順にかかげている。(たとえば、すぐ用言だけ続く例、ついで間に他の語のはいる例といった順である。)

しかし、『玉緒』のほうは必ずしもそうでない。第九段の「なり・

なる・なれ」では、「は」の結びとして「よをうち山と人〔は〕いふ〔なり〕」の証歌をあげている。しかし、「こそ」の結びに「物なれ」の例をあげているのだから、その立場に立てば、「人はいふなり」よりも前にある「よきもさかりは有し物なり」の歌を証歌としてあげてもよさそうなものである。とすれば、『玉緒』は、かなり任意にあげていったものかと判断される。

しかしながら、任意にあげていったにしても、疑問の点が生じる。『ひも鏡』は、第卅三段の「く・け」では、「ぞ」の結びとして

あかつきのしぎのはねがきもゝ羽がき君がこぬよは我〔ぞ〕かずか〔く〕

の歌をあげている。この歌は『義慣鈔』では「ぞ」をおいて五音第三の音でとまる証歌として最後にあがっているものである。しかし、これは「きく」「なく」などのその動詞だけのものではなく、「かずかく」という点で、最後にあげたものであろう。古今の初めのものなら「ものうかる音にうぐひすぞ鳴く」最後のものなら「尋ねくればぞありとだに聞く」ということになる。『義慣鈔』はともにあげている。それらをあげていったあとに、「かずかく」があがっているのである。したがって、『玉緒』のたまたま選んだ証歌が『義慣鈔』では最後にあがっているものであったということにしては、一致しすぎているということになろう。

また、第卅九段の「ん・め」の「や」の結びの証歌として『ひも鏡』は、

たなばたにかしつる糸のうちはへて年のを長くこひ〔や〕わたら〔ん〕

をあげている。これは『義慣鈔』では、「武」の条の「はねてには」の最初にあがっている歌であり、このあと十一首続く。『義慣鈔』では「らん」と動詞語尾「ら」＋「ん」とを意味上区別してはいるが、「ん」のほうは、またそれだけで一括して証歌を示しているわけでもない。これは「(ら)＋ん」のほうの例である。しかし、宣長は「ん」と「らん」を別にして扱っているのであるから、古今集の最初のものなら「去年とやいはんことしとやいはん」、そのほか、途中からとるなら、ここにあげるまでもなく、例は多い。『義慣鈔』の「(ら)ん」の最初の例と重なることはなさそうに思える。もっとも、『義慣鈔』では「いひ残す氐爾遠葉」として「しづ心なく花の散るらん」などの証歌を十一首あげているが、『玉緒』巻六の「かなの意に通ふらん」ではそれらにさらに四首を加えて説明している。したがって、宣長が自分で用例を見直していったことは考えられるところであり、しかも、その態度は八代集に及んでいるのであるが、三転証歌のところでは、ある部分は『義慣鈔』から任意に選んで（よって中ほどからのものもあるが最初や最後に一致するものも生じたと考えれば、「任意」と矛盾することはない。）いった、そしてそのあとをうめていったと考える余地も存する。

㈢　留りより上へかへるてにをは

第三に、巻二の「留りより上へかへるてにをは」として取りあげた語との関係がある。これについても、『玉緒』以前のてにをは研究書では部分的に説くところがあり、しだいに増加されていった点が認められる。それらの中、「上へかへる」と述べている条をいくつかの書から拾い出してみると、別表のようである。（『玉緒』にあげてある語の順にあげて、対照して示す。各書の欄の最後に、点線を施してあげたものは、『玉緒』では取りあげていない語である）

結句にとはと留るには必上へかへりて初五もし第三句に思ひきや　思はすよ　しらさりきなと置てかへる也。（第四）

凡句の終にしをと云はたゝいひのこす心有へし へしを・を・物を〉

上へかへるて（てとめの事）

結句にをととむるは皆上へかへるてには也。心をのこさすすくに上へかへるあり。心をこめていひまはすあり。〈しを・物を〉（第六）

むすひ句のてとまりは上へかへりて上にていひきる所あるへし。（第二十八）

波ととまる歌はかへる氐爾葉なり。にこる時もおなし。……止波とまりかへる氐爾乎波也。初二三四句いつれへもかへる也。（波ととまる歌はかへる氐爾葉なり。）にこる時もおなし。毛とまりかへる氐（爾）乎（葉）也。

遠下にあるを遠廻しといふ。凡上にかへる氐遨（爾）乎葉（波）也。

仁ととまるはかへる氐爾波也。初二三四句いつれにてもきるゝ所へかへるなり。〈なくに・間に〳〵・まに・かに〉

天ととまるうたおほよそかへる

低（氐）可（爾）乎波なり。

天文字にこりてとまるあり。これもかへる氐爾乎波なり。止ととまるは上にかへる低（氐）遨（爾）乎波也。

止に濁音のとまりあり。是は雖

結局のすゑにあるは上へかへるも有。又いひ残したるも有へし。〈は―ては・には〉

結句の末にあるは上へかへるもあり。又いひすてたるも有へし。〈を―しを・物を・てを・にを・とを……〉

結局の末にあるは上へかへるもあり。又いひすてたるも有へし。〈に―かに〉

結句の末にあるは上へかへるへし。〈て―にて・とて・して・てし・てん・てぬ・てへ〉

は　ば　も　を　に　て　で　と　ど

		の字にて、いへともの意なり。五句わたりておなし。	
	（第四十四詞をのこして上へかへりてことはる事ーとも）	（毛とまりかへる氐爾（乎）葉（波）也。）ともは雖の字にていへともの略にて、たとへは枝はをるともは……久へくととまる歌はまして（と）おなし。……	ども とも べく
	結句になてといふは上へかへる詞也。（第三十二）	良落句になからとあるはかへるてにをは也。〈なから・ものから〉	までながらものから
かへる哉（かなとめの事）		美ととまるにかへるてにをは有。乃とまりの歌かへへる氐爾（乎）葉（波）也。	ものゆゑ
		結句の末にたにと留る歌あり。……右のうた上へかへして聞へし。〈たに〉右等上へかへしてきくへし。〈つゝ〉是は大体上へかへる也。〈哉〉	まに〈

これから見ると、『義慣鈔』に至って、『玉緒』に取りあげているものがほとんど取りあげられていることが理解されよう。

なお、この表には示さなかったが、遁危子の『和歌童蒙抄』でも留りより上へかへる歌についてふれている。過去と現在の「し」に合わせてであるが、

てにをはのとまりはかへるしは過去そきにかへるしは現在そかしの歌をかかげている。そのあとの説明では「て」「に」「を」「は」の留りは、上へかへるものだと、一括して説く。

てと留り、にと留る哥は、かならず上にかへる所あるなり。それをわきまへぬ哥よみは、とまり句に字かすたらぬゆへに、ての字、はの字なとをたして七文字にする也。山はかすみて、花のさかりはなとゝいふても、ての字、はの字かへる所なし。

と述べ、それぞれ「て」「に」「を」「は」で留めている歌を二首ずつかかげ、さらにその外にも上へ返る歌があるとして、「と」「とも」「ども」「まで」で留る歌を一首ずつかかげているのである。さらにそのあとでは、

此外にもあれとも、先大旨右の哥ともにて心得へし。肝要の事は、結句より返る哥は上句に必切所あり。上四句の内いつくにてもきれる所へ返る也。切たる所へ小丸の印を付たり。心を付て見るへし。

と述べている。ここでも「切れる」ところに注意せよと述べている。

『童蒙抄』がここで言っているところを、『玉緒』と比較すると、次のようである。

すべてにをはの辞にて留りて。上へかへる意の哥は。いづれもみなその留りのてにをはの。かならず上の詞の切るる所迄へかゝるやうによむこと也。右にあげたる哥共を考ふべし。皆「の点よりゝのしるし迄へかへれり。ゝは語の切るゝところのしるし也。然るに後世には此格をしらで。留りのてにをはの。或は初句の詞などへのみかゝりて。其詞の切るる所迄へはかゝらぬ哥のおほきは。みなひがこと也。（巻二）

すなわち、(1)「て・に・を・は」で留る歌では、(2)上の切れるところへかへる（かかる）ものであること、(3)例歌でその切れるところを示すという方式まで似通っている。直接にどこまで影響関係があったかは分らぬが、同じ方向にあることは察せられよう。「かかり」の語と「結び」の辞とを明確にしたため。「留り」より「結び」めへかへる語について、特にふれる必要を感じたのであろう。

しかしながら、これらのてにをは研究書においては、留りとするものが多いために、錯雑したものとなっていた。宣長のいう「結び」の辞も含めている場合が多かったのであり、その区分について『網引綱』でいわゆる助詞と助動詞にあたるものの大部分が区別して示されるということにもなったのである。「かかり」の語と「結び」の辞の区別を明確にし、かつその間の「本末かなへあはするさだまり」を明らかにしたところに、他のてにをは研究書に見られなかった宣長の特色が存する。しかしながら、そのために「結び」の辞でない語であって、「留り」から上へかへる語について、特にふれておく必要が存したのである。

(四) 『草庵集玉箒』と『義慣鈔』の比較

このほか、『草庵集玉箒』と比べても、共通した点が見受けられる。『玉箒』では「なん」について「末をかけていふなん」「ねがふ心のなん」「ぞをゆるめていふなん」の三つの差別について述べ、そのうちの「ねがふ心のなん」については、

次にねがふ心のなんとは。ゆかなん。こさなん。たゝなん。来なゝん。いはなん。やまなん。あらなんなどゝ。かさたなはまら等の字よりつゞく也。証哥いと多し。これ定れる格也。意得おくべし。又えけせてねへめれ等よりもつゞきてねがふ心になるも有。

のように述べている。この「なん」について『義慣鈔』では、

奈牟は下知するやうの詞あり。又おさへてはぬるあり。下知するは願ふ意と聞ゆ。……下知の奈武といふは一説にあかさたなの文字をおきてなんとはぬるよし見ゆる。それは ならん かなん ととまるをいふにや。おほつかなし。けなん えなん なともいくらもあるをや。

のように述べていて、同様のことを指摘している。この「なん」について、他のてにをは研究書では、これほどに説くことはない。

むすび

以上、『義慣鈔』を主としてとりあげながら、『玉緒』の内容と比較してきた。その点からすれば、共通している点が認められよう。何らかの形で影響を与えたということは考えられてよいと思う。もし、よらなかったにしても、宣長がとりあげたことがらについて、この書がすでに注目していた点は認められる。宣長は、さような「てにをは」研究の方向を押し進めたのである。

もっとも、それにしても、『玉緒』の特色は、それらを総合して、係り結びという一つの理法のもとに整然と排列し直したところにある。そのために、かかりの語と結びの辞との区別を明らかにした。『網引綱』と比べても、そこで「めり」などと合わせていた「め」を「む・め」と、別類にし、また「けり」と合わせていた「き」を「き・し・しか」と別類にしている。また、そのように結びの辞を明らかにしたため、今度は他の助詞等の「留りより上へかへる」ものについて、一括して述べることを行なったのである。そして、『綱引綱』のように、語形の変化を主として緩急という点から見ていた態度に比べて、係りと結びの理法を重視する態度のほうが著しい。一貫した理法に基づいた上での、構想、体系への意欲がうかがわれるのである。

あとがき　この小稿を時枝先生にささげ、謹んで御冥福をお祈り申しあげる。卒論も国語の研究史に関係あることではあったが、先生のお世話で福岡女子大学へ赴任し、そこで国語学史を担当したことが、特に関心をもつ機縁となった。先生のお考えからすれば、細かい点をつつきすぎていることになろう。またお叱りを受けるようなものになったが、もはやそのお叱りも直接うかがえぬことになってしまったことを悲しく思う。

――東京大学助教授――